
転生の円舞曲（ワルツ）（仮）

金城 ユウ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

転生の円舞曲^{ワルツ}（仮）

【Nコード】

N5512C

【作者名】

金城 ヨウ

【あらすじ】

死に引き裂かれた二人は、転生を重ね、一万年と二千年後、再び出会う。こういった感じの電波を受信したので、ために形にしてみました。でも連載しないと完結しないお話です。実際に今回は、プロローグと第一話という感じです。

（前書き）

すみません。この話は完結していません。

プロローグと第一話という感じです。

それでも良いとって下さる方は、ご案内させていただきます。

一万年と二千年前。

「アザナエル様、お待ちください」

白銀の甲冑を着た女性を、メイド服の女性が引きとめようとしている。この二人には共通点があり、金髪碧眼であること、そして背中から大きな純白の翼が生えている。甲冑の女性は三対六枚の翼、メイド服の女性は、一対二枚の翼。

アザナエルと呼ばれた甲冑を着た女性は、メイドを無視して廊下をきまつた歩調で歩く。そして振り返らずにメイドに下がるように告げる。

「しかし、フアリエル様、戦死の報に間違いはありません」

「だまれ！フアリエルは熾天使^{セラフ}だぞ。悪魔達などに討たれるはずは無い。私は、真偽をこの目で見るまで信じぬ」

「だからと言って、知天使^{ケルブ}であられる、アザナエル様が戦場に赴くなど」

アザナエルは、メイドの娘に向き直ると怒りの表情で腰の剣を抜き、切っ先を娘に向ける。剣は、今のアザナエルの心中を表すように炎に包まれている。

「私が、悪魔どもに後れを取るとでも？」

「いえ、そんなことは……」

いきなり剣を向けられ困惑するメイド娘。

「剣をお引きください。アザナエル様」

声と共にアザナエルとメイド娘の間に、男が現れる。

「サナエルか。フアリエル様はどうしたの」

「もう、お聞きになっているはずです。これを」

サナエルがアザナエルに一振りの剣を差し出す。アザナエルはその剣を受け取ると鞘から抜いた。

「これは、フアリエル様の剣……」

そして、頭の中に流れ込んでくるファリエルの最後の姿。アザナエルはファリエルの剣を抱きしめる。

「ファリエル様、アザナエルは、何百、いえ、何千回生まれ変わっても、ファリエル様を見つけ出します。待っていてください」

アザナエルの青い瞳から、涙が零れ落ちた。

現代、天界。

「主よ。大変でございます」

白髭白髪 of 老人の部屋に飛び込んできたのは、一対二枚の白い翼を持つ下級天使だ。

「天使長様、ミカエル、ティアエル様が、これを残していなくなりました」

老人は、天使から書状を受け取る。中身は「ファリエル様が見つかったので、天使長を辞めます。探さないでください」と書かれている。

「主よ。大変でございます」

書状を読んでいると、更にもう一人、下級天使が部屋に飛び込んできた。

「天使長様が、天使長様が天界の門を強行突破しようとして、門番たちを相手に大暴れしています」

「能天使達を動員してもかまわぬ。ミカエルを連れ戻せ。絶対に天界から出してならぬ」

しかし、指示が出された頃には、天界の門の門番たちは、全員沈黙していた。

ここで、時間を少し巻き戻す。

その女性が白銀の甲冑姿で天界の門にやってきたのは、門番たちが知る限り初めてのことだったが、彼らは上司であるその女性を丁重に門の中に招き入れた。

「天使長様、本日はどのような用件でございましたか？」

門番たちの指揮官、二対四枚の翼を持つ能天使エクスシアはたずねた。

「天界の外に出る。門を開けてください」

「かしこまりました。では、主の許可証をお見せくださいますか？」

「許可証は無い」

「は？どういふことでございましょう？」

能天使エクスシアは聞き返していた。門を通過するには、主の許可証が必要なことくらい、三対六枚の翼を持つ熾天使セラフであり、天使長であるこの女性が知らないわけは無い。

「言葉の通りだ。ここは実力で通させてもらおう」

「それは、主への反逆罪と知っての発言か？」

「一万年と二千年、やっとフアリエル様を見つけたのです。私は、墮天されてもかまわないと思っていますの」

熾天使セラフが剣を抜くと、門番たちもそれぞれの武器を構えた。

召集された能天使達エクスシアが、天界門に着いたときには、天使長ミカエルミカエルの姿は無かった。代わりそこにあるのは、気絶させられた門番たち。

しかし、この情報は天界の一部のものを除いて開示されることは無かった。魔界との関係が緊迫している今、天使長が地上界に降りたというスキャンダルを、公にはできなかつたのである。

同日、魔界。

「なに？アスタルトがいなくなつた」

使い魔ファミリアがアスタロスに報告する。とそばにいた魔王サタンが反応を示した。

「お嬢さんがどうかしたのか？大公爵」

「娘が地上界に家出したようです。しかも、ケルベロスJrもつれて」

「サタンだけでなく、周りにいた悪魔たちも騒ぎ出す。」

「確かお嬢さんの魔力は、大公爵よりも強かったと記憶しているが……」

「はい、その通りでございます魔王様^{サタン}」

「返事を聞いて魔王^{サタン}は腕を組む。」

「地上界を滅ぼせるほどの魔力の持ち主が、野放しというわけか。大公爵、至急にお嬢さんを連れ戻せ。今、このことが天界に知れたら非常にまずい」

「はい。そのつもりです。では失礼します」

「アスタロスは、会議室を急ぎ足で出て行った。」

「しつこい……」

黒い三首の巨大な犬の背中に乗った、年のころ十七、八の少女は後ろを振り向きつぶやいた。黒髪黒眸の少女で、背中には三対六枚の漆黒の翼。地上界でいうゴスロリ風のファッションが良く似合っている。

後ろには、「アスタルトお嬢様、おまちください」などと叫びながら追いかけてくるものが数人。追いかけてくるのは家の召使たちだ。

とはいえ地上界とつながる地獄門までもう少しだ。振り切るのは時間の問題なのだ……

「地獄門までこのまま行っちゃうと、私たちはともかく、あの人たちはあなたのお父さんに食べられちゃうわね」

自分の乗る三首の黒犬、ケルベロスJr（愛称：ケルちゃん）に話すと、「地獄門に行くと、どうなるかは、彼らもわかってるよ。」

放っておけば」という思念がアスタルトに流れ込んでくる。

「そもそも、いけないのよ」

アスタルトは、呪文^{スベル}を詠唱し始める。

「混沌たる者 闇の中の王 その力を願い求める 闇の眠りを与えよ」

呪文が完成すると追っ手の召使たちが一人、また一人と地に臥していく。死んではない、ただ眠っているだけだ。雇い主である父の叱責は受けるかもしれないが、このまま進んで地獄の門番ケルベロスに食べられるよりは、はるかにマシである。

「さあ、ケルちゃん、急ぎましょう」

アスタロスが声をかけると、ケルベロスJrはうれしそうに吠えた。

「一万年と二千年、やっと見つけたのです。待っていてくださいフリエル様」

アスタルトは、頬を赤らめてつぶやいた。

大公爵アスタロスが地獄門に到着した時には、娘のアスタルトはケルベロスJrと共に地上界に出た後だった。

地上界。

「おはよう。奈江^{なえ}ちゃん」

小学校高学年ぐらいの少年が、年の頃十五、六の少女に声をかけた。ただ妙なのは少年が、名門私立高校の制服を着込んでいることである。結果から言えば妙なことはない、彼、蒼天^{そうつてんじん}仁は高校に通う一年生で、今年十六歳になるのだから。ただ百四十五センチの身長と童顔が彼を小学生に見せている。

「おはよう。仁」

奈江と呼ばれた少女が振り返って微笑んだ。仁より頭ひとつ分は背が高い。美少女と言ってよい顔立ちだ。人と違う点があるとしたら

その瞳の色だろう。右の瞳が黒、左が夏の空のような青色をしている。オッドアイ、ヘテロクロミヤなどと呼ぶ。

仁と奈江は幼馴染だが、仁の身長と童顔のせいで、姉弟に間違われることが多々ある。

ともあれ、学校へ向かい二人は並んで歩き出す。

「昨日、変な夢を見て、寝不足でかなわん」

「どんな夢を見たの？」

奈江が、興味津々といった感じで聞き返してきた。

「シルエットになっていて、どんな容姿なのかわからないけど、女の人に名前を呼ばれるんだ。なんか六枚の翼が背中から生えていたような。それで、呼ばれる名前んだけど、仁でなくて、フェリエルとかファリエルとかそんな感じの名前……」

「夢の中で、その人になっただけじゃないの？」

納得していない仁の表情。

「でも、確かに自分のことだっただけでわかるんだよね。不思議なことに「ただの夢よ。気にしないで学校にいこう」

奈江の微笑みに、仁は夢のことを無視することにした。

始業前、奈江は自分の席から、男友達と話す仁を眺めていた。

今朝の、仁の夢の話しには驚いた。奈江が最近見る夢の内容と共通部分があるからである。

夢の中で、奈江はアザナエルという女性天使になっている。背中には三対六枚の翼。

その奈江の前で落ちていく、金髪碧眼の同じく三対六枚の翼を持つ男性。しかし、奈江は確信していた、その男性が仁であることを。そして奈江は叫ぶ。「ファリエル様」と……

「三対六枚の翼」「ファリエル」「ファリエルと名前を呼ぶ女性」ただの偶然なのだろうか。

詳しく話を聞いたわけでもないのにつながる奇妙な符合……
でも、いくら考えても答えは出なかった。

「ご馳走様でした」

奈江に作ってもらった弁当を食べ終えて、仁は芝生の上に横になる。

「ちょっと、仁。お行儀が悪いよ」

奈江が注意するが、いつものことなので通用しないことはわかっている。

奈江が何故、仁の弁当を作っているかという、恋人同士というわけではなく。単身赴任の父親に母親が付いてしまったため、仁が一人暮らしを余儀なくされているためである。

しかも、仁は放っておくと、三食カップラーメンで済ませてしまうほど食事に無頓着だ。

背が伸びないのも、その辺に原因があるかもしれないと奈江は思っている。

ともあれ、元々世話好きの奈江は、仁を放っておくことができずに、毎朝毎晩お隣の蒼天家に通っている。

いつもと同じ昼休みのはずだった。このときまでは。

二人の目の前に、三首の巨大な黒犬が現れた。あまりのことに硬直して動けない仁と奈江。

黒犬、ケルベロスJrも、二人に危害を加えるつもりが無いらしい。あくびをして首の後ろを掻いている。

ケルベロスJrの前に一人の少女が降り立つ。黒髪黒眸の顔立ちの整った人形みたいな愛らしい少女で、背中には三対六枚の漆黒の翼、ゴスロリファッションが少女の美しさを際立たせている。その少女が仁を見つめる。

そして、仁と奈江を挟んでケルベロスJrとは反対側に降り立つ

た人物。

白銀の甲冑に身を包んだ金髪碧眼の女性。背中には三対六枚の純白の翼。こちらは綺麗なお姉さんタイプだ。黒の少女と同じように彼女も仁を見つめている。

さらに状況が理解できずに、硬直している仁と奈江……

しばらくして、黒の少女、アスタルトと白い女性、ティアエルは同時に叫んだ。

「「ファリエル様。一万年と二千年前から、お会いしとございまして！」」

二人が仁に抱きつく。

この日から、天使と悪魔と人間の奇妙な共同生活が始まった。

(後書き)

この話、【創聖のアクエリオン】を聞いているときに電波受信しました(笑)

ちなみにこんな歌です(サビ)

一万年と二千年前から あ・い・し・て・る

八千年過ぎた頃からもっと恋しくなった

一億と二千年あとも愛してる

君を知ったその日から 僕の地獄に音楽は絶えない

歌詞：<http://plaza.rakuten.co.jp/edgerunners/diary/200506160000/>

動画：<http://www.youtube.com/watch?v=HWBOPJ0srjI>

h?v=HWBOPJ0srjI

今回は、断片的に浮かんだものを適当に形にただけです。

設定を作りこめば、今回の分だけでも、プロローグ、第一話、三話まで作れたはずです。

でも、連載モノを増やす予定は今のところ無いです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5512c/>

転生の円舞曲（ワルツ）（仮）

2008年11月7日08時20分発行